

distorted the real character of the languages so studied.
(一覽)

この追悼文を書くに当って、在日スウェーデン大使館広報課の石井新太郎氏およびスウェーデンのストックホルム大学東洋語研究所中国学科の Gunnel Norrholm Shioya 氏に一方ならぬお世話になった。茲に厚く謝意を表す。また BMFEA Vol. XXVIII(1956) に載せられた Else Glahn 女士の A List of Works by Bernhard Karlgren は大変参考になった。もともとこの目録は一九五四年までの著作を網羅的に記しているが、その後一九五八年より一九七〇年までに少くとも BMFEA に二二篇の論文が載せられている。なお、アメリカのコロンビア大学の Hans Bielenstein 教授の簡単な追悼文が JAOS に載せられる由である。

筆を擱くに当って、先生の御冥福を心から祈るものである。
(一九七九・七・三)

金子良太氏の訃

榎 一 雄

金子良太(りょうたい)氏は、昭和三年八月四日、真言宗

豊山派無量寺住職金子勇本師の次男として東京に生まれた。昭和二十年三月、豊山中学校を、同二十三年三月、大正大学専門部仏教学科を、同二十五年十二月、大正大学文学部印度仏教学科を卒業した。そして昭和二十六年一月、蔵和辞典編輯会の助手に就任、併せて桜ヶ丘高等女学校の教諭に任じた。蔵和辞典編輯会というのは、昭和十五年、河口慧海氏を中心として東洋文庫に設けられたもので、河口氏が昭和二十年逝去された後は池田澄達氏が主宰し、池田氏の歿後(昭和二十五年十月七日)は、昭和三十年四月から三十六年三月まで渡辺昭宏氏を中心となって、引続き資料を蒐集していたものである。金子氏を編輯会に入れたのは大正大学の壬生台舜教授であったようである。壬生教授も河口慧海氏を助けて語彙の採集に当っておられた。

蔵和辞典編輯会の仕事は、昭和三十六年四月、新設の東洋文庫研究部チベット研究室に引継がれた。その中心となったのは多田等観・北村甫の両氏であった。

これよりさき金子氏はインドに留学するため、昭和二十八年六月、編輯会と桜ヶ丘高等学校とを退職した。インドではカルカッタ大学で仏教学を専攻する予定であった。しかし氏はそもそも目標であったチベット学に専心するため、予定を変更して当時ガントックのウルスワティールヒマラヤ研究所(Urusvati Himalayan Research Institute)において所長

イリッド (ハートリッド) 氏 (Jopuh Hinoraeenu Pepux ngn Pepux, George N. Roerich, 3 (16) 8.1962-21.5.1960) にいてチベット語を学習した。ロ氏は一九五七年ソ連に帰ったから、金子氏はロ氏がロシア以外で教えた最晩年の弟子の一人であったろう。尤も金子氏がロ氏から何をどのように習ったかは聞いていない。

この頃私はニューデリーに新設されたインド国際研究学校 (Indian School of International Studies) に東亜学科を新設するため東京大学から派遣されていたが、金子氏の父君から託されていたものを手渡すために、ニューデリーで金子氏に会った。昭和三十年三月のことである。デリーを中心とする北インドでは十月から翌年の二月までが最も快適な季節で、樹木には緑の葉が付き、百花は文字通り燎乱と咲いて妍を競う。路傍に他の季節では見られない露店が出るのはこの頃である。その露店は人の出入の激しい大きなホテルの近所に出ることが多いが、イムペリアルホテルの前にはチベット製の仏像とか装飾品・貨幣の類を並べたチベット人の店がいくつか出されるのである。そこに案内すると、金子氏はしゃがみこんで店番のおばさんからいろいろのことを聞出していた。それによると、これらのチベット人はラダックから毎年来る、品物はチベット製の本物である、今はどこかに泊っていて、何月とかには国に帰る、仲間は何人いる、食事は宿でも、店

でも自分達で作る。金子氏は一々その内容を通訳してくれるのである。しかし、品物は一つも買わない。チベット人のおばさんは無迷惑したことであるが、金子氏はロイリッヒの高第たる面目を恐らく遺憾なく發揮していたのである。単音節のチベット語を一つ一つ吐き出しながら、手つきや身振りですれを補っていた同氏の姿が、今でも見えるようである。

金子氏は、昭和三十一年三月に帰朝し、同じ年の四月から正式に東洋文庫の人として活躍を開始した。始めは国立国会図書館支部東洋文庫の補助員として、続いて三十六年四月から財団法人東洋文庫の研究生として、東洋文庫所蔵の老大なチベット語文献を撫し、その種類や内容についての理解につとめていたようである。

たまたま英国のケムブリッジ大学から日本語の講師に適任の人を求めて来た。金子氏はこれに応じ、昭和三十九年九月から彼の地に在って日本語を講ずること四年、四十三年六月帰朝して三たび東洋文庫に入り、東洋文庫嘱託・ユネスコ東アジア文化研究センター調査資料室長を経て、東洋文庫研究員に任じ、チベット研究室の室長として、そのいくつかの研究事業を宰領し、チベット文籍の整理・補充の重責に任ずることになった。時に昭和五十年四月、東洋文庫のチベット関係の事業は氏を中心として動こうとしたのである。

当時、チベット研究室にはチベット人二人を始め、何人かの日本人研究者がいたが、金子氏を除く日本人研究者はいずれも兼任であった。そこで日本人研究者で専任の人を中心に据えて、チベット研究室を運営しようというのが東洋文庫の年来の希望であった。それがこの時実現の緒に就こうとしたのである。研究者が個人の書齋に若干の文献や資料を蒐めて自分の好みの研究に従事するという伝統的な形は、如何なる問題についても豊富な関係材料の蒐集が可能となり、その網羅的な蒐集なくしては十分な研究の推進を期待し得ない現在にあっては、到底そのまま維持できないこと明かである。しかも、そうした材料の蒐集と整理には多くの費用と人員と空間とを必要とする。さらにチベット語文献の所蔵について、その種類の多様さと分量の豊富さにおいて他に比肩する機関の少ない東洋文庫の場合には、既取の文献との密接な関連を考慮しつつ、これを補充することを考えて行かなければならない。それには単に東洋文庫のチベット語文献を己の研究に利用することだけを考える人ではなく、チベット学全体の立場から東洋文庫の既取の資料を整理し、補充し、東洋文庫をして最もアップトゥウーデイトな研究の中心たらしめる人がいなくてはいけない。私は金子氏にそうした人を期待していたのである。それは必ずしも金子氏がその学問において、見識において、人物において、既にそれに適當する資格資質

を具えているからというのではなく、金子氏に努力してそうした資格資質を身につけて貰いたいと願ったのである。

何事にも几帳面で徹底を期して已まない金子氏は、まず未整理のまま放置されていた新刊のチベット文圖書を分類配架し、サンスクリット写本と多田等観氏旧蔵の仏画の類を整理した。仏画の解説目録の前半は東洋文庫歐文紀要第三十六冊（一九七八）に発表せられ、金子氏の遺稿の一つとなった。後半は同じ紀要第三十七冊に発表される予定である。サンスクリット写本の解説目録も稿成っているということであるので、適當に編集した上で刊行したいと思う。

東洋文庫所蔵のチベット文献については、外部からいろいろの問合せがある。それについては一切金子氏が応じ、複写の要求があれば、金子氏から必要な文献を写真部に回すのが常であった。また閲覧希望者については氏自ら文献の出納に當っていた。

金子氏はロシア語を含む歐洲の諸語に通じていたようであるが、特に英文に堪能であった。ケムブリッジに四年滞在したことがそれに関係があったのかどうか明かでないが、氏の書く英文は実に水際立っていた。英国人の友人からも氏の英語を褒める手紙を貰ったことがある。氏は数年前から欧文紀要の編集を担当してくれていたが、欧文紀要が予定通り各年度内に出了たのは、全く氏の協力の賜物である。そして英訳者

に適任の人がない場合は、氏自ら進んで翻譯に当った。その最近の例は欧文紀要第三十六冊（一九七八）の板野長八・山本達郎の両氏と私の論文で、これらはすべて金子氏の手に成るものである。それは正に英語の文章である。翻譯を業とする人は少くないが、その英文と称するものの英語でなご加減に全く恐入るほかない場合が多い。金子氏が方面の連う東洋史の論文の内容を正しく理解し、しかもこれを誠に美しい英語で表現してくれているのを見ると、頭の下る思いを禁じ得ない。特に感心するのは速いことである。前記の三つの論文にしても、せいぜい一つを一週間足らずで仕上げていた。下書きをしてそれをタイプライターで打つのであるが、整然としていて打直しの跡一つ見えないのも驚きであった。

チベット学における金子氏の造詣の広さについては、本文末の著作目録、特に平凡社のアジア歴史事典の執筆項目がよくそれを物語っているであろう。これについて書脱してはならないのは、氏とケムブリッジ大学のベイリー (Sir Harold W. Bailey) 教授との交際である。氏はケムブリッジに出講して教授と知合い、その知遇を得、チベット学に関する知識で教授を助けたこと一再ならず、教授も金子氏の力量を認めて情報の提供を求めていたようである。謙抑なる金子氏はその詳しいことを語ることがないが、嘗て私に向ってケムブリッジに推薦して頂いて一番有難かつたことは碩学ベイリー

教授と知合ったことであると言ったことがある。ベイリー教授も亦その論文の別刷を絶えず金子氏に贈り、金子氏の姓名を明記してその提供にかかる材料を引用している（例えば BSOAS, XXXVI, 2, 1973, pp. 224-225）。

それはいずれにしても、金子氏を中心としてチベット研究室を運営しようとする計画は結局うまく行かなかつた。金子氏は室長たること昭和五十年四月から五十一年三月に至る僅か一年。自から研究室を地下に移して、チベット研究室と縁を絶ってしまった。チベット研究室は再び金子氏以前の無住ともいふべき状態に戻つた。金子氏が移つたのは地下室の写真の現像室であつたところである。移転した晩春初夏の頃には寧ろ涼しくてよかつたが、暖房の設備のない冬には流石に寒さが身に沁みたのであろう、氏は一度ならず、二度も三度もそうした陋室に氏を遷した東洋文庫の処置を非難したのである。私はその都度東洋文庫がそのチベット文献の保管と補充とに専任の人を置こうとしている方針を反覆説明して、氏にもう一度チベット研究室に帰って室長としての仕事をやるように説いた。最後には、チベット研究室の室長を引受けていながら、勝手に引退して地下に潜るような行為をしてもらつては困るとも言った。しかし、金子氏は一旦決めたらそれを変えような人ではなかつた。そしてたまたま淑徳学園大学から教授に就任することを要請されると、東洋文庫を辞

してこれに應じることにした。こうした動きの中で、三月十日の発病、同月十五日の急逝を迎えたのである。享年五十歳。これから学問の円熟期に入ろうとする段階で、計画しているところもいろいろあったことであろう。それを思うと、本人のためには勿論、チベット学のために残念に堪えない。

最後に私が最も氏を徳としている一事を記して、この拙い追悼の文章を終わろう。戦後、文字通り無一文になった東洋文庫の維持のために、私は資金集めに狂奔した。文庫の研究部の若い人々の中にはそうした私を蔭で乞食と呼んで軽蔑する者もあった。その中であって金子氏は、私を支持するのが文庫の再生のための急務であることを説き、まず沖電気株式会社幹部に私を引合せてくれた。私は氏とごまごまだ今日のように整備されていなかった品川駅の南口で電車を降りて、空地の中にあるこの会社を訪ねた時のことを忘れることができない。会社の好意で若干の寄附を頂へんことができたが、それにもまして嬉しく感ぜられたのは金子君の心意気であった。私は感謝の微意を表すべく、たまたま手許に二組あったマナック教授編のフォリオ版七冊の資料集「チベット及びネパールにおけるイタリヤ宣教師紀」(I missionari italiani nel Tibet e nel Nepal, a cura di Luciano Petech, I-VII, Roma: ISMEO, 1952-1956) を贈呈した。葬儀の日、墓前に掲げられた金子氏の書札にこれが置かれてくるのを見て、

当年の氏の温情を想起した。そしてあらためて氏の急逝を惜んだ。正に「頭を回らせば知己の人既に遠し、千山万壑、風雨の声」である。

次に掲げる著作目録は東洋文庫研究部の松本明氏が調査せられたものである。

論文之部

- (1) 「土観とその著 Grub-mihah thams-cad」(『文獻』第6号, pp. 17-19, 特殊文庫連合協会, 昭和36年12月刊)。
- (2) 「敦煌出土未解明文書一・二に就いて」(『豊山学報』第17・18合併号, pp. 150-142, 豊山宗学研修所, 昭和48年3月刊)
- (3) 「Kダツツェ梵文「法華経」余話」(『東洋文庫書報』第8号, pp. 78-91, 東洋文庫, 昭和52年3月刊)
- (4) 「Pelhot 2782 文書所見のDyau Tceyi-sinā」(『豊山学報』第22号, pp. 130-125, 豊山宗学研修所, 昭和52年3月刊)
- (5) List of Tshag-ris in the possession of the Toyo Bunko, in: Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 36, 1979, pp. 233-248.
- (6) A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Toyo Bunko, in collaboration

with Yoshihiro Matsumami, to be published in: Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No.37, March, 1980.

書評之部

- (1) 「ローケーション・ヤング・トラフ氏『ウルガ版甘珠爾』について」(『東洋学報』第42巻第3号, pp. 126-130, 東洋文庫(東洋学術協会), 昭和34年12月刊)
- (2) 「稲葉正就, 佐藤長共訳『ウララン・テゾテル HULLAN DEB THER』——チベツチ年代記——」(『史林』第48巻第5号, pp. 148-150, 史学研究会, 昭和40年9月刊)
- (3) 「レリ」トヒ先生著作目録」(『東洋史研究』第19巻第3号, pp. 111-112, 東洋史研究会, 昭和35年12月刊, 彙報; 若松寛著「レリ」トヒ教授逝く」に附して)

翻訳之部

- (1) 「H. W. ベイリーー講演; コータン語『法華經綱要』について」(序文・辻直四郎, 訳・註・ベイリーー教授著作目録・金子良大) (『豊山学報』第16号, pp. 154-130, 豊山宗学研修所, 昭和46年3月刊)
- (2) 「Sir Harold W. Bailey; An Orientalist's Visit 1968-1969」(はしがき・辻直四郎, 訳・金子良大) (『鈴木学術財団研究年報』No.5-7, pp. 50-54, 鈴木学術財団, 昭和46年3月刊)

東 洋 学

- (3) On the Constitution of the Empire of Japan, A. & B, In: MEIJI JAPAN through Contemporary Sources, Vol. 3, 1869-1894, pp. 113-123, Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, March, 1972

- (4) 「ルチアーン・ベテツク講演; 西チベツトニラダツク地方のデアグン派」(『東洋学報』第59巻第1・2号, 033-049頁, 東洋文庫, 昭和52年10月, 訳・註)

その他

- (1) 口頭発表

- ① 「初期サキヤ派史」(東洋文庫談話会, 昭和31年10月20日, 要旨: 『東洋文庫年報・昭和31年度版』pp. 23, 昭和32年11月刊, 同英文要旨: "The History of the Early Sakya School" 『東洋学報』第40巻第1号, pp. 05, 東洋文庫(東洋学術協会), 昭和32年6月刊)

- ② 「八思巴血脈中の一問題」(東洋文庫談話会, 昭和33年1月18日, 要旨: 『東洋文庫年報・昭和32年度版』pp. 47, 昭和33年10月刊)

- ③ 「張金山燃燈文について」(東洋文庫談話会, 昭和44年6月28日)

- (2) 回顧と展望

- ① チベツトの項 (1961年の歴史学界—回顧と展望—『史学雑誌』71-5, pp. 220-221, 史学会, 昭和37年5月刊)

東 洋 学 1111

- ② チベットの項 (1968年の歴史学界一回顧と展望一、『史学雑誌』78-5, pp. 243-246, 史学会, 昭和44年5月刊)
- ③ チベットの項 (1972年の歴史学会一回顧と展望一、『史学雑誌』82-5, pp. 246-248, 史学会, 昭和48年5月刊)
- (3) 事典
- ① アジア歴史事典 (一括後掲, 50項目)
- ② チベットの項目
 『アラルアテ大百科』第161号, pp. 3846-3847, 株式会社日本マニュアル・ネーダー, 昭和48年10月刊)
- ③-1 「戦後30年間に於ける新しい展開——仏教学(チベット・中央アジア)の項目」
 (奈良康明ほか編『現代仏教を知る大事典—學術編—』金花舎, 原稿用紙400字詰30枚, 昭和54年末出版予定)
- ③-2 「アジア仏教の現状——チベット, ネパール・ブータンの項」
 (奈良康明ほか編『現代仏教を知る大事典—国際編—』金花舎, 原稿用紙400字詰15枚+15枚, 同54年末出版予定)
- (4) 執筆協力
- ① 「Buddhist Manuscripts of the Bir Library」
 『大正大学研究紀要』第40巻, pp. 1-30. 大正大学梵文研究室編, 昭和29年刊)
- ② H. W. Bailey, Taklamakan miscellany, In: Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Vol. XXXVI (1973), Part 2, pp. 224-225.
- ③ 「ヘデアソ中央アジア探検紀行全集」第3巻—チベットの冒険— (訳, 鈴木武樹, 昭和40年初版, 白水社, 増訂新版全15巻中, 新四巻『ヘデアソ探検紀行全集』昭和55年1月出版予定) (固有名詞表記校正)
- (5) その他
- ① 「日本西蔵学会々報第21号, 編集後記, 彙報」(昭和50年3月31日刊, pp. 12, 18, 日本西蔵学会)
- ② 「日本西蔵学会々報第22号, 大会記事, 編集後記」(昭和51年3月31日刊, pp. 16, 日本西蔵学会)
- ③ 「ラマ教とはなにか」
 (『歴史公論』—ソルカ・ロードと日本—, 三周年記念増大号, 昭和53年12月号(通巻37号), pp. 150-151, 雄山閣, 昭和53年12月刊)
- アジア歴史事典 (平凡社, 1959年12月15日刊) 担当項目
 第2巻
- p. 196 かつぷつ (活仏, Huo-fu)
- p. 202 カトマーンポク (Kathmandu)
- p. 225 カマラシラ (Kamalasila 蓮華戒)
- p. 227 カム (喀木, Khams)

p. 244 ガルトク (Sgar-ḥbrog, Gartok 噶大克)

p. 246 カルマ・テンキェン (Karma bstan-skyon)

p. 304 カンチエネ (康濟雅, Khan-che-gnas)

p. 309 ガンデン (噶丹, dGaḥ-Idan)

p. 396 ギェルマ・ナムギェル (ḥGyur-med rnam-rgyal

珠爾然特那木札勒)

第3巻

p. 43 *グゼ* (Gu-ge)

p. 79 クンガ・ギェルツェン (Kun-dgaḥ rgyal-mtshan)

p. 87 クンナム (skRu-ḥbum, Kunbum)

p. 135 ゲワ・ラズセル (dGe-ba rab-gsal)

p. 135 ケーレン・チマ (Körösi Cosma Sander,

Alexander Cosma de Körös)

第4巻

p. 32 サキヤ派 (Sa-skya-pa 薩迦派)

p. 78 サンギエ・ギナムツマ (Sangs-rgyas rgya-mtsho,

桑結嘉穆錯)

p. 136 シガツエ (日喀則, gZi-ka-rtse, Shigatse)

p. 268 ジャンジヤ・フトクト (章嘉呼図克図, ICan-skya

hu-thug-thu)

第5巻

p. 264 セラ (Se-ra, 色拉)

p. 410 ソンツェン・ガンボ (Sron-btsan sgam-po, 松贊

岡保)

第6巻

p. 92 タクタ (sTag-brag rin-po-che)

p. 99 タソルンボ (hKra-sis lhun-po, 札什倫布)

p. 100 ダース (Sarat Chandra Das)

p. 114 ダライ・ラマ (達賴喇嘛, Dalai Lama)

p. 116 ターラチータ (Tāranātha)

p. 172 チヤムド (Chab-mdo 昌都, 察木多)

p. 343 チョーネ (Cō-ni, 卓尼)

p. 346 チョンヂー (ḥPhyön-rgyas)

p. 379 ツァン (gTsan, 藏)

p. 383 ツォンカバ (Tson-Kha-pa, 宗喀巴)

p. 412 テイソソ・デツェン (Khri-sron Ide-btsan, 乞黎

蘇龍凱贊)

p. 432 デソドリ (Ippolito Desideri)

p. 440 デナデル・マールボ (Deb-ther dmar-po)

p. 446 デルゲ (sDe-dge 德格)

第7巻

p. 163 ドルジュワ (Dorje)

p. 178 トソミ・サンボータ (Thon-mi Sambhota)

p. 394 パドマサンバズラ (Padmasambhava, 蓮華生)

- p. 436 バルド・トール(Bar-do thos-grol)
 p. 461 パンチェン・ラマ (Pan-chen bla-na, Panchen Lama 班禅喇嘛)

第8巻

- p. 147 フトクト (孚図克図, Khutukutu)
 p. 149 フトツ (Bu-ston)
 p. 238 ベル (Sir Charles Alfred Bell)
 p. 296 ボーグル (George Bogle)
 p. 323 ボラネ (Pho-lha-nas, 原羅解)
 p. 330 ボン教 (Bon)
 p. 362 マハーヴェットパティ (Mahāvīrutpati)
 p. 411 ミラ・ラパ (Mid-la ras-pa)

第9巻

- p. 97 ヨク (Evaniste Régis Huc)
 p. 327 リンチェン・チンボ (Lin-chen bran-po)
 p. 361 ヴーリヒ (Yurij Nikolaevich Renkh)

第十六回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

一九七九年のクリルタイは、七月十五日(日)より十八日(水)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開かれた。出席者は左記の五十三名である。

青木富太郎、荒川正晴(早稲田大学)、塙博(同)、海老沢哲雄(埼玉大学)、永島勇二(国士館大学)、福原一夫(金沢大学)、二木博史(東京外国語大学)、後藤晃(山形大学)、林徹(東京大学)、林俊雄(古代オリエント博物館)、樋口康一(京都大学)、堀川徹(京都大学)、細谷良夫(弘前大学)、茨木久一郎(明治大学)、石橋秀雄(立教大学)、石橋崇雄(東京大学)、金崎誠(株式会社シルクロード)、神田信夫(明治大学)、堅田裕司(東京大学)、川上晴(大阪大学)、川瀬豊子(同)、菊池俊彦(北海道大学)、北川誠一(同)、北村高(竜谷大学)、窪田新一(大正大学)、国木田明子(竜谷大学)、間野英二(京都大学)、松村潤(日本大学)、松崎光久(早稲田大学)、三木薫(同)、宮脇淳子(大阪大学)、森川哲雄(九州大学)、長沢和俊(早稲田大学)、小谷仲男(鳥取大学)、岡田英弘(東京外国語大学)、岡本孝(金沢大学)、大西澄子(東洋文庫)、大沢陽典(立命館大学)、佐伯有